

今日の漢詩の会では、漢詩の創作法についてご講義いただきました。

漢詩、と言っても古体詩と近体詩の二つに大きく分かります。近体詩は今から1300年程前の唐代初期に確立した作詩法で、それより以前の比較的自由的なスタイルで作られた詩を古体詩(古詩)といいます。1300年前の日本といえば、奈良時代で、万葉集が編纂されたころに当たります。文学の歴史だけ見ても約3000年、日本の倍以上の歴史を持つ中国にとっては、唐の時代は必ずしも古いとは言えないようですね。

近体詩は唐の時代の音を基礎にして作られた決まりですが、現代中国語の標準音ではすでに失われている音があります。唐の時代に一体どんな音で漢詩が詠まれていたかは、今の普通話話す中国の一般の人々にとっては、想像すらできません。一方、福建語や広東語等、南方音には唐の時代に近い音が残り、普通話で判別不能となっている韻の識別が全く不可能ではありません。

現在の中国では、標準音の韻を新韻、唐の時代の音を旧韻(平水韻)と呼び、新韻を基にして作詩しようという新韻派と、従来の方法での作詩に拘る旧韻派との対立があり、最近のネット上では両派が共存しているようです。

話は変わりますが、私も何十年も前に中国で、新しく想定された唐代音で詠んだという漢詩の音源を耳にしたことがあります。意味は分からないものの、聴いた感じは広東語みたいな響きだったように思います。大変新鮮で、今でもハッキリ記憶に残っています。

では、日本人の私達が漢詩を作詩することは果たして可能なのか?と言いますと、実は可能なの

です。日本にも多くの漢詩の作者がいました。平安時代では菅原道真が突出していますが、多くの貴族たちが漢詩を作りました。遣唐使の影響もあり、当時の文人貴族たちの中には中国語を話す人たちが数多くいたと推定されますが、江戸時代の頼山陽、明治時代の夏目漱石など中国語は話せなくても、素晴らしい作品を残した日本人が沢山います。江戸時代までの教養ある日本人には漢詩の素養は必須だったようですね。この風潮は明治期まで続きました。今でも中国語を話せない漢詩創作愛好者が、相当数存在します。中には中国人が

qiū dǔ gē 秋 浦 歌 作者: 李白

bái fà sān qiān zhàng yuán chóu sì gè cháng 白发三千丈, 缘愁似个长。

bù zhī míng jìng lǐ hé chù dé qiū shuāng 不知明镜里, 何处得秋霜。

\*「秋浦」とは現在の安徽省南部池州市にある地名

見てびっくりするようなハイレベルの作品も見られます。

さて本題に入ります。まずは李白の『秋浦歌』を例にとって、近体詩の中の一つ、五言絶句の平仄の見分け方についてご報告しましょう。平仄という言葉はよく耳にしますが、実態は一体どんなのか。それを知る人も最近では少なくなりましたね。しかし今でも、普通の漢和辞典を引けば、平仄と押韻が分かるようになっています。

取り敢えず原詩を見ながら平仄について観察してみましょう。平声とは平坦な音ということで、現代中国語の第一声と第二声がこれに当たります。したがって第一声と第二声は、おおむね平声とみなすことができます。

仄声は傾いた、ギクシャクした音という意味

で、<sup>じょうせい</sup>上声、<sup>きよせい</sup>去声、<sup>にゅうせい</sup>入声（<sup>にっしょう</sup>入声）の三種類に分かれます。このうち、上声と去声は、現代中国語の第三声と第四声に当たります。したがって第三声と第四声は、おおむね仄声とみなすことができます。

ところが、古代音の仄声の中には入声という音があり、この音は、南方の方言に一部残るだけで、現代中国語の標準音からは消えています。そして現代中国語の第一声、二声、第三声、第四声すべての声調の中に紛れ込んでいるのです。したがって、現代中国語、及びそれに近い音で話す北方地域出身の大多数の中国人にとって、入声を識別するのはとても困難です。

しかしこの入声は、日本語の仮名表記が（～ク）（～ツ）となるので、識別が比較的容易です。例えば、国（コク）活（カツ）白（ハク）得（トク）などです。また、現代日本人にはほとんど馴染がなくなりましたが、旧仮名遣いで「～フ」となるものも入声です。例えば合（ガフ）法（ホフ）蝶（テフ）葉（エフ）などで、これらも漢和辞典や一部の国語辞典で調べられます。

したがって中国語の発音をかじっている日本人で、中国語と日本語の辞書が引ければ、あとは漢詩のルールに合わせて字を選ぶだけ、となります。同様の理由で、日本語の辞書を引ける中国人ならば、誰でも平仄を判別できるというわけです。

さて、今回学んだ近体詩の作法は、この平声（平坦な調子）と仄声（ギクシャクした調子）をバランス良く配置することによって、成り立っています。実際の音は、唐代以後徐々に変化し、近代以後は大きく変化しましたが、唐代にいったん確立した作詩法は、その後も変化することはありませんでした。だから後世の詩人たちは実際にはない音を基に作詩することになったのです。漢詩の作法の難しさはこの一点に尽きるといってよいでしょう。

次に、五言絶句のルールをまとめてみました。

平仄配置、押韻の法則、起承転結の法則、です。講座では七言絶句も取り上げられましたが、話を簡単にするため、今回のご報告では五言絶句に限ることにします。

平声は○、仄声は●で表示します。

## ■平仄配置

近体詩には平仄配置に一定の決まりがあります。五言絶句では次のようになっています。

1. 二・四不同（二字目と四字目は互いに平仄を異にする）

×○×●×、または×●×○×

2. 反法（起句と承句とでは、二字目・四字目の平仄を逆にする。承句と結句とでも同様に、平仄を逆にする

起句 ×●×○× または 起句 ×○×●×

承句 ×○×●× 承句 ×●×○×

結句 ×●×○× 結句 ×○×●×

3. 粘法（承句と転句とでは、二字目・四字目の平仄を同じにする）

承句 ×○×●× または 承句 ×●×○×

転句 ×○×●× 転句 ×●×○×

4. 忌孤平（平声が仄声に挟まれる形 ●○●を嫌う）

5. 避下三連（下の三字に同じ平声または仄声が続くのを避ける）

以上、原詩がこの法則に合っているかどうか確かめてみてください。

## ■押韻の法則

押韻にも一定の決まりがあります。押韻というのは、日本語の詩歌では難しいですね。日本語は母音も子音も単調すぎて、一つの音節だけで韻を踏んでも音楽的効果に乏しいからでしょうか。漢詩の韻の種類は106もあるそうで、昔の日本の漢詩人は韻書（音韻の一覧表）をいつも手元に置

いていたそうです。106の韻にはそれぞれ名称がついていて、東韻、陽韻、蕭韻、灰韻などと呼ばれています。漢和辞典で確かめることも可能です。中国国内でも最近では韻の種類を調べる小冊子が出版されているようです。ネット上でも韻を検索することができます。興味のある方は「平水韻表<sup>へいすい</sup>」で検索してみてください。カナ変換でも出てきます。

五言絶句の押韻の法則は次のようになっています。

1. 五言絶句の場合は通常、承句、結句の二か所で押韻する(正格)
2. 起句、承句、結句の三か所で押韻することもある(変格)
3. 転句の末尾では押韻しない。その場合、韻を踏んだ字とは平仄を逆にする。例えば平声で押韻したとき、転句の末尾は仄声にする。仄声で押韻したときは、その逆。

以上、これも原詩で確かめてみてください

#### ■起承転結の法則

1. 起句=出だし。注意を引き付ける(ナニナニ…?)
2. 承句=自然な形で起句を受け、次へとつなぐ(フンフン、ソレデ…)
3. 転句=視点、発想に変化を付ける。(エエッ!ナニ? コレ)
4. 結句=全体をまとめる(ナルホド! 了解!)

これを原詩に当てはめてみましょう。

白髪三千丈(ナニナニ…?)

愁いに縁<sup>よ</sup>りて箇<sup>か</sup>くの似<sup>ごと</sup>く長し(フンフン、ソレデ…)

知らず明鏡の裏(ナニ? コレ)

何れの処<sup>ところ</sup>にか秋霜<sup>そう</sup>を得たる(ナルホド、了解)

——苦勞続きで、いつの間にか老いてしまった自分の姿を鏡に映して嘆いているんだなあ。この詩人は……。

日本語にすっかり浸透している「起承転結」という言葉が絶句のルールによって生まれた言葉と知ってびっくりしました。植田先生曰く

「これはサザエさんの4コマ漫画と全く同じ。是非サザエさんの漫画を見てください。今の4コマ漫画は起承転結がないからチンプンカンプンだけどねえ。西洋のシンフォニーも大体4楽章に分かれていて、ちなみにベートーベンの『第九』を例にとると、第1楽章では重々しく静かに印象深く、第2楽章では前楽章を受けてやや高揚感をはらみ、第3楽章でガラリと雰囲気が変わる…。最後の第4楽章では、前の三つの楽章を受けて最大限に盛り上げる……みたいになっている。どうも起承転結の美学には洋の東西を問わず共通のものがあるかも。中国の漢詩、西洋のシンフォニー、日本の4コマ漫画、みんな起承転結だねえ。」

なる程、そう言えばそうだなあ、と、一同納得で頷きました。